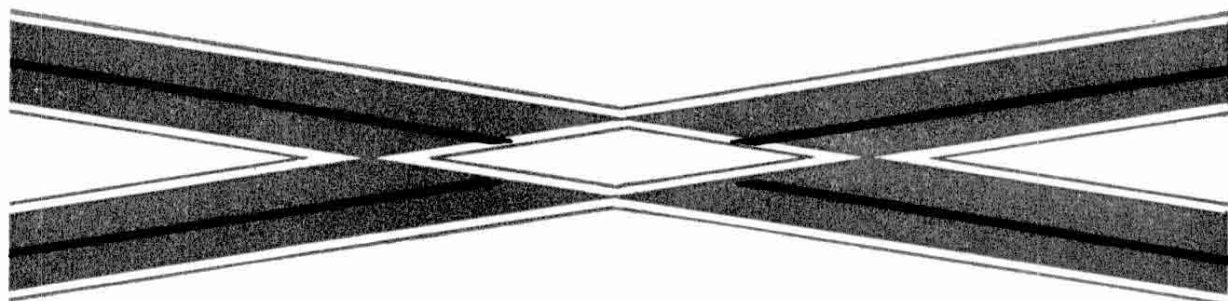


生島廣治郎

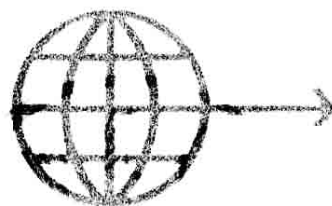
世界経済学著作選集

第一部 世界経済の構造変動

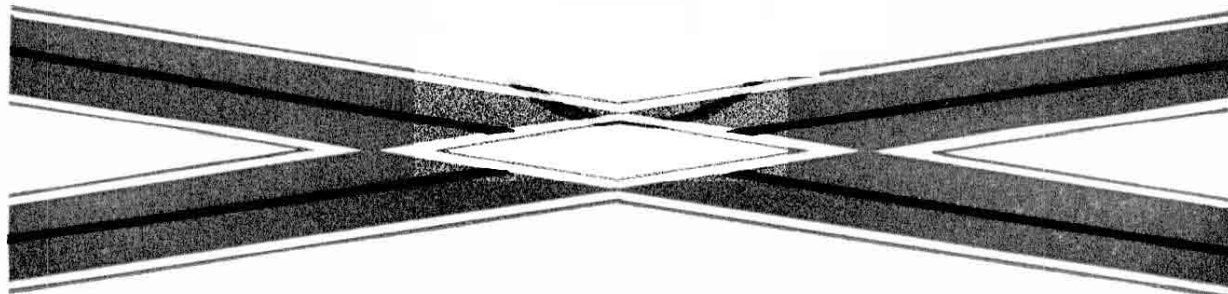
第二部 世界経済と貿易政策



第Ⅱ卷



東京白桃書房 神田



世界経済学著作選集 第Ⅱ巻

昭和49年7月20日 初版印刷
昭和49年7月26日 初版発行

著 者 生 島 廣 治 郎
編 集 者 世 界 経 済 学
著 作 選 集 刊 行 会
発 行 者 大 矢 順 一 郎
印 刷 者 内 山 一 郎

* * *

発 行 所 株 式 白 桃 書 房
会 社

101 東京都千代田区神田神保町1-42
電話(03)294-8911(代) 振替東京20192番

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

昭文堂印刷／日進堂製本

書籍コード 3333-964227-6915

第一部

世界経済の構造変動

序

世界経済はいつになれば好景気になるか、おそらくこの問題ほど関心の深いものはなからうが、同時にむずかしい問題はない。もとより世界には権威ある景気研究所が、たとえばベルリンやハーバードにあって多年景気観測を発表してきたが、藤本幸太郎博士の帰朝談によれば、近年はしばしば観測がはずれるので研究所の規模を著しく縮小したということである。

しからば何がかように景気観測を昏迷に導くか、これにはもちろん複雑な事情があるが、その最も有力なものの一つは国民経済および世界経済の構造変動である。国民経済や世界経済の構造に特に大変動が起こらなければ景気観測も格別困難な問題ではないが、経済の構造が大戦前から戦後にかけて大変動を遂げた現代においては景気、不景気の循環を観測することは実に難事中の難事である。いまこれを氣象にたとえたと私たちの住む地上に晴天、曇天、雨天が繰り返され、また春夏秋冬が繰り返されているのは太陽系の特定の構造と日月星辰の特定の運行を前提としている。ゆえにもし太陽系に異変が起こり太陽が没して再び地上に現われぬとなれば地上は永久の冬となってしまうだろう。もっともこれは極端な比喻であって、景気循環がつねに特定の経済構造を前提としていることをいうのである。

そもそも構造変動ということはドイツのキール大学世界経済研究所の元所長であったハルムス師 (Geheimrat Harms) の提唱する *Strukturwandlungen der Volks- und Weltwirtschaft* の意味であって元来キール学派の用語であっ

た。この概念は多少漠然としているが、國民經濟および世界經濟の構成 (Aufbau) に全面的または局部的に生ずる變動で、その性質上長期的なもので、すでに生じた變動およびまさに起こらんとする變動の兩者を包含している。世界經濟の農業構造の變動といえば耕地面積、耕勸技術、土地所有制、農地經營などの農業生産の基礎から農産物市場の組織、さらに人間の栄養方法、嗜好、風俗などの消費の基礎の變動を意味することになる。

景氣變動は構造變動と全然別個の現象で、ただ市場の作用および反作用の一時的現象である。たとえば相場騰落、利子の上下、インフレーション、デフレーション、失業等である。ただし構造變動と景氣變動とは必ずしも個々の場合に前者が長期的、後者が一時的となっていない。構造變動が性質上長期的であってもなんらかの出来事で突然解消する場合もあり、反対に景氣變動が性質上一時的の反作用であっても長期的影響をおよぼす場合もある。ゆえに具体的には同一の現象であって、これが經濟全般の情勢からあるいは景氣的、あるいは構造的と判断される場合が少なくない。いま一国に工業品の輸入減少が起こった場合に、これがその国の購買力の低下から生じたのであれば景氣的輸入減少であるが、国内に工業が発達して生じたのであれば構造的輸入減少である。そして景氣觀測の昏迷は兩者の區別の不明から生ずることが多く、兩者の區別は今後世界經濟恐慌がいかに進展するかについて根本的問題である。

本書はかかる立場から主として大戰前より戰後にかけて世界經濟の構造が、いかに變動したかの趨勢を明らかにするよう努めた。そして現代の世界經濟の大勢を判断すべき基本現象を説明せんとしている。ただし叙述上、引用書は紙面の都合からほとんど省略し、また統計的數字はキールの世界經濟研究所で調査したものを相当多く使用した。なにも短期間内に脱稿を急がねばならなかったために十分反省と推敲を重ねる余裕がなく、これをいま公表することとはまことに忸怩たる次第であるが、拙稿を通じて時局に対し多少でも判断の助けとなれば望外の幸いである。終り

に全部校正の勞をとられた日本評論社の方々に感謝しなければならぬ。

昭和九年五月七日

生
島
広
治
郎

序

五

目次

第一部 世界經濟の構造變動

序

第一章 戰後世界經濟の景氣變動と構造變動……………七

一 總 說……………七

二 世界經濟恐慌の發生と進展……………九

三 一九三二年以來の情勢……………三

第二章 世界經濟の生成および發展……………一九

一 世界經濟の産業構造變動の地域的基礎……………一九

(1) 古代よりアメリカ發見以前まで……………二〇

(2) アメリカ發見より現代まで……………二三

二 世界經濟の産業構造變動の文化的基礎……………二六

三 世界經濟の消費構造の變動……………三〇

(1)	社会階級的欲求と世界経済との関係	三二
(2)	宗教的欲求と世界経済との関係	三三
(3)	靈藥的欲求と世界経済との関係	三三
第三章 世界経済の農業構造および変動		
上 戦前の世界農業構造		
一	西部および中部欧州の農業構造	三七
二	遠圈農業地帯の農業構造	四一
下 戦後世界経済の農業構造変動		
一	世界穀類市場の需要構造の変動	四四
(1)	食料品消費の構造変動	四四
(2)	西部および中部欧州の農産物需要の変動	四六
(3)	欧州以外の小麦需要の変動	五五
二	世界穀類市場の供給構造の変動	五七
(1)	遠圈農業地帯の世界市場に対する地位の変動	五七
(2)	遠圈農業地帯の穀類生産構造の変動	六四
(3)	世界小麦市場の景気変動と市場統制	六八
(4)	概要	七三

第四章	世界經濟の原料産業の構造および變動	七九
一	世界經濟の原料生産の構造變動	七九
(1)	概観	七九
(2)	世界原料生産の構造變動	八二
二	世界原料貿易の構造變動	八四
(1)	世界原料生産と輸出との関係	八四
(2)	世界原料輸出の構造變動	八五
三	世界原料消費の構造變動	八九
(1)	工業国の原料生産と原料輸入との関係	八九
(2)	欧州工業国の原料消費の構造變動	九一
(3)	米国の原料消費の構造變動	九四
四	技術の進歩と原料産業の構造變動	九七
(1)	動力技術の進歩が燃料の生産および消費に及ぼす影響	九七
(2)	原料生産および消費技術の進歩の影響	一〇五
五	原料政策および風俗変遷の影響	一一
(1)	原料独占政策の影響	一一
(2)	原料自給政策の影響	一一〇

(3) 風俗の変遷の影響	三三
第五章 世界経済の工業構造および変動	三七
上 世界工業生産および貿易の構造および変動	三七
一 戦前より戦後にいたる世界工業の発展傾向	三七
(1) 概観	三七
(2) 世界工業の種類の構造変動	三〇
(3) 世界工業の地域的構造変動	三四
二 世界経済の工業構造変動が世界貿易に及ぼす影響	三七
三 世界工業品市場の争奪戦	三九
(1) 工業品輸出国の順位	三九
(2) 一九二五年以後の世界工業品市場戦	四八
下 世界工業品需要の構造変動	五一
一 生産財の需要構造と合理化	五一
(1) 生産財の需要構造の変動	五三
(2) 機械の需要構造の変動	五六
二 交通機関需要財の需要構造の変動	六一
(1) 鉄道および自動車の趨勢	六二

(2) 電話および無線電話	一六
(3) 書信および印刷物	一七
三 消費財工業の需要構造の変動	一七
(1) 生活標準の向上が消費財の需要に及ぼす影響	一七
(2) 織物の需要の変動	一七
(3) 衣料以外の消費財の需要	一八
第六章 世界貿易の構造変動	一八
一 世界貿易発展の概観	一八
二 世界貿易の地域的構造変動	一八
三 結 論	一九

第二部 世界経済と貿易政策

序

第一編 貿易変動論

第一章 貿易の静態理論	三二
目 次	

一	古典学派の貿易理論	二二
二	比較生産費の法則	二三
三	比較生産費法則の否定論	二六
四	貿易はいかにして行なわれるか	三〇
五	比較生産費法則否定論の検討	三〇
第二章	世界経済恐慌の構造的な原因と恐慌の発展	三七
一	世界経済恐慌の構造的な原因	三七
二	世界経済の原料産業の構造変動と恐慌因	四二
三	世界経済の工業構造の変動と恐慌因	四三
四	世界経済恐慌の発展	四六
第三章	世界貿易の景気的発展	五一
一	世界貿易景気の周期	五一
二	世界貿易の金額と数量と価格の相関的変動	五三
三	農業国と工業国との交換関係	五九
四	世界貿易景気と国内景気との関係	六五
五	世界貿易上における各国の割合	七一

第四章	世界農業国貿易の景気変動	二七
一	戦後農業国の貿易尻の動向	二七
二	農業国の輸出	二〇
三	主要食料品および原料品の輸出減少の傾向	二六
四	農業国の輸入	二四
第五章	世界恐慌以来の農業国の工業化	三〇
一	農業国工業化の発展	三〇
二	農業国工業化発展の原因	三〇
三	農業国工業化の地域別考察	三〇
四	農業国工業化の旧工業国に及ぼす影響	三〇
第二編 貿易政策		
第一章	貿易政策と世界市場経済の動向	三五
一	戦前	三五
二	戦後の保護主義と世界経済不況	三七
第二章	会議外交と世界経済政策との関係	三三

一	戦後の会議外交	三三
二	国家主義、帝国主義、国際協調主義	三五
三	会議外交と世界経済政策	三八
四	ブリュッセル会議と一九二七年の世界経済会議	三一
五	国際連盟の世界貿易政策	三三
六	輸出入禁止および制限撤廃会議と関税休戦会議	三六
七	世界通貨および経済会議	三八
八	結言	四二
第三章	貿易政策の地域的協力と大地域経済	四九
一	オスロ協定	四九
二	ウーシー協定	五一
三	大地域経済の概念	五三
第四章	ドナウ地域経済問題	六一
一	農業国経済的協力の国際会議	六一
二	ドイツ・オーストリア関税同盟	六八
三	特惠条約と三角条約	七一
四	タージュー案	七五

五	ローザンヌ會議、ストレザ會議、ロンドン世界經濟會議および小麦會議	三七七
第五章	大英帝国の貿易政策	三六七
一	英國の貿易政策的転向の事情	三六七
二	イギリスの保護關稅政策	三九〇
三	英帝国の關稅政策	三九五
四	英國と自治領との利害の一致と衝突	三九八
五	オタワ會議	四〇三
六	オタワ貿易協定の影響	四〇六
七	オタワ協定の実績	四〇八
八	大英帝国地域經濟の拡大運動	四一四
第六章	現代の保護主義の分類	四二七
一	世界經濟恐慌以来の保護主義の發展と分類	四二七
二	行政的保護主義と貨幣政策的保護主義	四三〇
三	生産政策的保護主義	四三四
第七章	貿易政策的保護主義	四三七
一	輸入禁止および認許制	四三七

二 貿易独占および国産使用強制	四四〇
三 コンタンジャン	四四四
四 関税政策	四四六
五 保護関税政策の限界	四四九
第八章 輸入割当制度	四五五
一 関税割当制度	四五五
二 輸入割当の技術的方法	四六〇
三 輸入割当制の貿易政策的根拠と影響	四六九
四 世界経済恐慌以来の輸入割当制の発展	四七四
第九章 為替管理制度	四八七
一 為替管理の目標	四八七
二 為替管理の方法	四八九
三 北欧諸国の為替管理	四九二
四 中欧および南欧の為替管理	四九三
五 アジア、中南米、豪州、その他の為替管理	四九七
六 為替管理の実績	五〇〇